

# DU WATCH

劣化ウラン研究会ニュースレター 第15号 (2005/12)

-----〔はじめに〕-----

11月6日は2001年11月5日の国連総会で、毎年11月6日を「戦争と武力紛争による環境収奪を防止する国際デー」と宣言された日です。(決議56/4)。

決議では、この行動に取り組むにあたり、武力紛争の際の環境破壊は、紛争の終結後も長期にわたり国境や世代を超えて広がり続け、生態系や自然や資源に重大な損傷を与えることを憂慮しています。

昨年に引き続き、この日に合わせて前後一週間にわたり日本各地で劣化ウラン兵器の廃絶を求める行動が取り組まれました。

米国からはジェラルド・マシューさんとジャニス・マシューさんが来日しました。ジェラルド・マシューさんはニューヨーク州兵としてイラクに派遣され、その際にウラニウムに被曝しました。彼の体内から高い濃度の劣化ウランが検出されています。

東京で行われた11月6日の「劣化ウラン禁止を求める国際行動デー」(劣化ウラン禁止・市民ネットワーク主催)の講演から、その一部を紹介いたします。

## ジェラルド・マシューさんの話

私がイラクに到着して6日目ぐらいから顔が腫れはじめました。

これが私の顔が腫れ始めたときの写真です、見てください。この写真を見てくだされば、どんな顔になったかが分かると思います。皆さんに回しますので見てください。

18トントラックの輸送車で軍隊のいろんな機材を北方に運びました。

私がトラックで運んだものは食べ物や水などです。行きは、とりあえず食料と水を運んでいましたが、帰り道は今度は南に向かって破壊された装甲車やトラックやその残骸、タイヤなど劣化ウランによって破壊されたと思われるものを運んだのです。

そのときはもちろんそれが劣化ウランによって破壊されたものとは知りませんでした。私は命令されたとおりの任務をやったまでです。

その輸送を始めてまもなく、私の頭痛がますますひどくなっていき、その原因は水を十分に飲んでいないせいだろうと考えていました。

最初は何も知らなかった。とくに現地はとても暑

かったのでそのせいだと思っていたのです。しかし休暇を取って妻に会いに帰国したときにも頭痛がひどくなるのがあって、これは何か異変が起きているのではないかと初めて気がつきました。

そのころとても頭の状態がひどいので、トラックを運転しているときに、基地の中で交通事故を起こしてしまいました。

## 発病

その交通事故があった後に神経医院に脳波の診察を受けるように言われて行きました、12のテストを受けたうちの一つが私の顔をそっとなでて、目を閉じてそれを感じることができるか、そういうものでした。そのとき、お医者さんがさわったのを私は全く感じることは出来ませんでした。「何のことを言っているんだい」という状態でした。

神経医は今度は私を眼科医に送ったのです。医師は交通事故の原因を視力の低下だと、私は物が二重三重に見えたり、かすんで見えたりすることがあったのでそのせいだと思い、眼科医に今度は送られたのです。

今度は頭の断層写真を撮ると言われました。ところが私の頭痛はいっこうに治まらないのです。月に70回ぐらい、ひどい頭痛が最大1日に5回から8回ぐらい起きました。それで私はドイツの病院に送られました。

ドイツの病院で出会ったもう一人の兵士、レイモン・ラモスさんという人ですけれど、彼は私と全く同じ症状を持っていました、実は彼が駐留をしていたのはサマーワというところだったのです。

私たち二人は全く同じ症状を持っていた兵隊なのですが、違う場所に駐留していました。一人はサマーワ、私は一か所ではなく運転手でしたからいろんな場所を移動していましたが、主に南部を中心にバスラ、ナザリーアでした。クェートにもね。

私のいた場所というのはこの戦争ではなく、前の戦争（91年の第一次湾岸戦争）でひどく爆撃を受けた場所です。そこで私は寝泊まりをしていたのです。そこは第一次湾岸戦争のときにひどい戦闘があった場所です。

ドイツの医者は、二人がどうしてこんなに頭痛がひどいのか、それが続くのか、全く原因を突きとめることは出来ませんでした。それでついに私たち二人は、アメリカのワシントンDCの病院に送られました。

ここで私たちが投与されたのはたくさんの薬物です。名前は全部は分からなかったんですけれども、ほとんどはいろんな種類の鎮静剤で、これを次から次へと与えられました。つまり、痛みがひどいのでそれを止める鎮静薬を大量に投与されたのです。

それから私たちはニュージャージーにありますフォートディクスという別の基地に送られました。そこでは頭痛が沈静化するまで待つようにということで、一種の休暇のような感じで、頭痛が休まったらまたイラクに送るということでその基地に送られました。

## マスメディアとの接触

そのフォートディクス基地にいたときにニューヨーク・デイリー・ニュースという新聞社がレイモン・ラモスさんにコンタクトをとってきました。このニューヨーク・デイリー・ニュースの言うには、サマーワ地域が劣化ウランで汚染されているということで検査を受けるためにアサフ・ドラコビッチ博士を紹介してくれました。それでレイモン・

ラモスと、彼と同じ部隊にいた8人が検査受けることになりました。

まもなく、レイモン・ラモスと8人の結果が戻ってきたのですが、それと時期を同じくして私のほうにも別の検査結果がもたらされました。

妻は妊娠していたのですけれど、彼女のお腹の中の赤ん坊には指がないということが分かったのです。

フォートディクスの9人の兵士達の検査結果と劣化ウランとの関係などはニュースとして多く取り上げられ、騒ぎになりました。特に軍関係の病院、基地関係の間ではそれが大変な騒動になっていったのです。

私がレイモン・ラモスに自分の娘の話のことをしました。今これが彼女の写真、大変な写真ですけれども、右手が（指がないので）ドアノブのようになっています。

レイモン・ラモスが私のことをニューヨーク・デイリー・ニュースに話してくれました。そうしたらニューヨーク・デイリー・ニュースは私にも検査をしないかと持ちかけてきました。あなたのやった仕事からすればもしかしたら可能性がある、身体の被ばくの可能性があるということで検査をしないかと。

わたくしはそのニューヨーク・デイリー・ニュースの検査を受けることにしましたが、それと時を同じくして軍でも同じようにテストを受けることが決まって、そちらのテストも受けることにしました。両方のテストを受けることにしたのです。

その後、2004年5月5日に私は米陸軍を除隊しました。その間、検査結果を何も知らされませんでした。私の娘は6月28日に写真のように指のない状態で産まれました。

## 体内に多量のウランが

やっと2004年9月11日になってニューヨーク・デイリー・ニュースからコンタクトがありました。私はサマーワで被ばくをした兵士達よりも、平均4倍から8倍も多くの劣化ウランが体内に入っているという検査結果でした。

今、私が持っているのが検査結果のFAXです。私は説明してほしいといいました。私はそのことが信じられませんでしたので、この結果を持って私は米陸軍にコンタクトしました。彼らも私の検査をしていたのに何の連絡も来なかったからです。

「あなたは何も標本を提出しなかった」と陸軍は

言ってきました。実際私はそれを提出したのにも拘わらず、軍は「何もあなたから受け取っていません」という回答をしました。

私はワシントン軍曹、女性で軍の法医学の担当ですが、その彼女にFAXをしました。

軍隊は私の標本を受け取っていないと言いましたが、私は医者用に一つと、自分用に一つと、標本用に一つと、三つ提出していたんです。

これがニューヨーク・デイリー・ニュースの表紙に掲載された写真です。

この写真はインターネットでも見ることができます。2004年9月29日のニューヨーク・デイリー・ニュースで見ることができます。

また、陸軍がもう1回テストをしないかと言ってきたんです。さいしょは「ハイ」と同意したんですけど、そのときに彼らがニューヨーク・デイリー・ニュースの結果を提出してくれというんですね。もうすでにテストしてそれさえもちゃんとやってくれないのにどうしてニューヨーク・デイリー・ニュースの結果をみるのか疑問に思って結局「ノー」と判断しました。未だに軍はテストを受けろ受けろといいますが私は拒んでいます。

実は、私がこのように話し始めたのは、妻が以前からそのことに関して始めていたからです。もし、私がこの妻を持っていなければ今のように話すことはなかったと思います。

## 米軍の反応

ちょっと読みたい書類がありますので読ませてください。

この手紙は、私の妻がホワイトハウスのブッシュ大統領宛に手紙を書いたことへの返事です。

「あなたの夫に関してはご安心ください。劣化ウランの被ばくはしていません。彼の質問票には劣化ウランに関する記述がありませんでした」と書いてありますが、実際、私はそのときまだ劣化ウランという存在とか名前さえ知らなかったのです。自分が知らないものに対して、どうしてアンケートに答えることができるのでしょうか。

実は私と同じ隊からもう一人、軍の検査を受けていました。軍はその人の試料は持っているのに、私はないと言っています。

今まで軍の中で1350人が検査を受けています。その後3人から少し高いウラン濃度が検出されました。でもその原因は、彼らが恐怖心を、劣化ウランに対する恐怖心を持っているためだとい

うふうに言っている。

この手紙の中で一番いいパートは次です。聞いてください。「私たちの半世紀以上に渡るウラン研究の結果、ウラン及び劣化ウランというものはいかなる先天性奇形を及ぼすものではありません。だからご安心ください」

いいですか、これは軍隊がですね、ペンタゴンが、私の妻、つまりあの右手に奇形を持って生まれてきた、その子供を持つものに対して、あなたのだんなさんは全く劣化ウランに被ばくしていません。しかも、劣化ウランは安全ですと言い張っているわけですね。

私の政府が、どのように仕事をし、どのような政府かというのはこれで分かると思います。

## 進む症状・裁判へ

私の最初の症状というのは、まず、顔が腫れた。それから目が見えなくなった。それから、頭痛それが初期の症状です。

それから症状はまた更に悪化し、今でも顔の腫れとか、身体の腫れが続いています。また、脳下垂体に腫瘍ができています。それから神経痛、神経症、全身麻痺した感じになることもあります。それから暑くなってきました。燃えるような感じに、ああそれから片頭痛ですね。これは前よりひどくなっています。

このことに対して、私たちは何をしているか。私たちは1月からアメリカ政府に対して訴訟を起こしています。

全部で8人が訴訟に踏み切りました。私自身、それからハーバート・リード、レイモンド・ラモス、フィクサー・デ이버、オード・シンマ、アンソニー・ディーノーニ、そしてアンソニー・ギブツ。この8人です。今一緒に集団でアメリカ政府を訴えています。(訳注：本人と娘のビクトリアを含めて総勢9人になるという。)

9つの訴訟をしていますので、その一人一人に対して向こうは回答をしなければならぬ。一人がもし失敗したとしても、二人目三人目・・・9人目の間には何らかの結果、良き結果がもたらされるのではないかということでそれぞれに訴訟をしています。

## 劣化ウラン兵器の廃絶を

今日は本当に、私にこのような話す機会を与えてくださってありがとうございます。

私は、日本に着いてから広島、長崎、大阪とこのように話しをして参りました。たくさんの方所に行って、たくさんの方に助けられています。本当に感謝いたします。

私たちは今日ここに座って、実は劣化ウランの使用を推進しているんです。いいですか、この光、電気、原子力発電できているんじゃないんですか。ですから原発をやめてソーラーに太陽光に変えなければなりません。

皆さんのソルジャー、皆さんの自衛隊はですね、サマワという街にいます。皆さんの政府はきっと彼らが病気になっても皆さんに知らせないでしょう。彼らに近づける唯一の方法は、その彼らの家族にコンタクトすることです。

今病気でであろうとなかろうと、正しい正確な検査をすること、それが大事です。実はですね、ピッツ・パトリックというペンタゴンの職員ですけども、今年の1月に米国下院議会の武器委員会で証言をしています。彼はハッキリ言ったのです。サマワは劣化ウランで汚染されていると。

皆さん。今日私たちは、ここに集まっているのは日本に限らず、アメリカでもどこでも劣化ウランの使用、製造そういった物をすべて無くしていかなければいけない。そのためには、一つにならなければいけないんです。私たちが一つになればなるほどこの問題は解決されていくんです。今日は本当にありがとうございました。

同時通訳 グローバル・ピース・キャンペーン  
きくち ゆみさん  
構成 / 編集・劣化ウラン研究会

## マシューさんから届いた 電子メール

翻訳は嘉指信雄さん

夫と私は、日本に私たちを招待して下さったことを感謝しております。劣化ウランとその影響についての私たちの経験を皆さんと共有することを可能にしてくれた、他の37グループの皆さんにもお礼申し上げます。

日本での私たちの経験はとても感銘深く、決して忘れることはないでしょう。私たちはメッセージを伝えるために日本に行きましたが、お返しに、自分たちのものとなったメッセージを携えてアメ

リカに戻ってきました。

皆さんと日本の人々は、両手を広げて私たちを迎え入れてくださり、私たちが見舞われたことの話に率直に耳を傾けてくださいました。率直に、この問題を受け入れて下さったのは、日本とニューヨークの反劣化ウラン・グループだけです。私たちは、改めて心からお礼申し上げます。

どうか、この感謝の気持ちを皆さんにお伝えください。皆さん全てを決して忘れません。この繋がりをずっと大事にしましょう。そう！肥田（舜太郎）先生に夫を診てもらえるようにアレンジしてください、どうもありがとう。肥田先生の言葉はとて有り難く、私は、先生の全てのアドバイスに従おうと思います。

皆様に幸ありますように、また、忘れないでください、二人のアメリカ人が皆さんの仲間だということ。私たちが一緒になって変化を引き起こすことができるよう祈念しています。

敬具

ジャンス&ジェラルド・マシュー

2005年11月16日

---

---

## ニュースクリップ

---

---

### 中国新聞地域ニュース より

### 写真が語るヒバクの実態 倉敷

2005年12月10日

戦争や核物質の放射線で被害を受けた子どもたちの様子などを撮影した写真展「写真が語る戦争の真実・ヒバクの実態」が9日から11日にかけて倉敷市のJR倉敷駅前商店街内のピオス憩いの広場で開かれた。写真パネル約170点でインドのジャドゴダ鉱山（採掘場）に近い村で生まれて立つこともできない男の子や、劣化ウラン弾の影響で無脳症を患って生まれたイラクの子どもなど、核物質の放射線被害を生々しく伝えている。広島、長崎の被爆者が体験を描いた絵もある。主催は倉敷医療生協などでつくる実行委員会。池上尚美委員長は「核の被害が今なお世界で広がっていることを

知ってほしい」と話していた。（田村勇雄）







# 本の紹介

## 世界は変えられる

J C J 日本ジャーナリスト会議

市民メディア賞受賞

T U P が伝えるイラク戦争の「真実」と「非戦」

T U P : Translators United for Peace

(平和をめざす翻訳者たち)

定価 1800 円 + 税 四六判 上製 240 ページ

ISBN4-8228-0480-1

## 世界は変えられる II

一戦争の被害者って? 加害者って? -

T U P : Translators United for Peace

(平和をめざす翻訳家たち)

定価 1800 円 + 税 四六判 上製 288 ページ

ISBN4-8228-0489-5

## イラク占領と核汚染

森住 卓 = 写真・文

A 5・160 ページ (写真 96 ページ / 文章 64 ページ)

2005 年 8 月 6 日発行

本体価格 2000 円 ISBN4-87498-347-2

米英軍のイラク攻撃は、イラクの人々に何をもたらしたのか!? イラク戦争開戦前夜から占領下を含め通算八回、イラク各地を取材。

軍事占領と劣化ウラン弾、イエローケーキなどによる放射能に苦しむ人々の姿を、鮮烈な写真と文章で伝えるフォトドキュメント!

<http://www.morizumi-pj.com/>

## 「放射能兵器・劣化ウラン — 核の戦場・ウラン汚染地帯」

劣化ウラン研究会編、技術と人間社発行

2003 年 3 月 定価 2500 円

〒162-0814 東京都新宿区新小川町 3-16

TEL:03-3260-9321

FAX:03-3260-9320

「ボクは死ぬんだ。死んでしまうのだ。」イラクの小児病棟では連日、血を吐きながら子どもたちが死んでゆく。劣化ウランは史上最悪の大量殺りく兵器である。この兵器を使用しているかぎり、人類だけでなく、地球上の生きとし生けるものに未来はない!

<主要目次>

第1章 危険な劣化ウラン弾

第2章 劣化ウランの軍事転用

第3章 核燃料サイクルと劣化ウラン

第4章 身近にあらわれる劣化ウラン

第5章 劣化ウランおよび劣化ウラン兵器  
廃絶運動

<著者紹介> (50音順)

伊藤政子 アラブの子どもとなかよくする  
会代表

新倉修 青山学院大学法学部教授

野村修身 電磁波問題市民研究会代表

藤田祐幸 慶応義塾大学物理学教室助教授

森住卓 フォトジャーナリスト

矢ヶ崎克馬 琉球大学理学部教授

山崎久隆 劣化ウラン研究会代表

劣化ウラン兵器を

造らせない 持たせない 使わせない

## 劣化ウラン研究会

〒176-0002 東京都練馬区桜台 1-3-5 野村方 TEL: 03-3238-9035 (たんぽぽ舎)

E-mail: [zt4h-ymsk@asahi-net.or.jp](mailto:zt4h-ymsk@asahi-net.or.jp) (山崎) URL: <http://www.jca.apc.org/DUCJ/>

入会方法: 通信欄に住所・氏名・電話番号・Eメールアドレスを明記して、  
年会費 (個人 2000 円・団体 4000 円) を下記口座へお振込みください。

郵便振替口座 00100-2-155130 劣化ウラン研究会